

**第2回「(仮称)奈良2025」事業基本構想・基本計画  
検討懇話会の意見等の概要**

|            |                                |
|------------|--------------------------------|
| 開催日時       | 令和6年 2月 20日(火) 午後1時30分から午後3時まで |
| 開催場所       | 奈良市役所 中央棟 5階 秘書広報課会議室          |
| 意見等を求める内容等 | 「(仮称)奈良2025」事業基本構想・基本計画について    |
| 参加者        | 出席者 委員9人、オブザーバー1人、事務局 8人       |
| 開催形態       | 公開 (傍聴人 0人)                    |
| 担当課        | 観光経済部 観光戦略課                    |

意見等の内容の取り纏め

≪事務局からの事業概要説明≫

事務局から事業内容等について説明を行い、基本構想・基本計画を策定するため、意見等を求めたい旨の説明を行う。

1. 基本理念について

- ・ Creative Exchange 創造的文化交流事業 2025-2027

本事業は、シルクロードとの直接の交流を通して、国際色豊かな天平文化を育んだ奈良市の歴史に着目しつつ、東アジア・中央アジアをはじめとする世界の歴史文化都市との創造的文化交流を推進することで、国際交流を軸とした歴史文化都市の創造的発展モデルを構築し、世界に発信する。

多様な文化を受容することで発展した天平文化は、1300年の時を経たいまもなお、奈良市の重要な地域資源、観光資源となっている。

本事業では、こうした奈良の歴史に学び、多様かつ創造的な国際交流を推進し、その成果を奈良市の未来に継承する。

文化芸術の持つ創造性を地域振興、観光・産業振興等に領域横断的に活用し、地域課題の解決に取り組む「創造都市」の理論的バックボーンを確立したリチャード・フロリダ(米;2008)は、才能(Talent)、技術(Technology)とともに、寛容さ(Tolerance)を創造都市の成立要件とした。平城京はまさに、往時最高の才能と技術、そして寛容さを併せ持つ創造都市でもあったといえる。

世界で文明の衝突や価値観の相剋が進む現代社会において、寛容さを養うことには大きな意義があるものと考えます。2025年から2027年の3か年にわたる国際文化交流事業を推進することで、多様な文化に触れ、寛容性と創造性を養い、奈良市の持続可能な発展に結実させていくことを目指す。

## 2. 事業構成

- ・ 奈良・サマルカンド特別交流展
- ・ 舞台芸術交流事業
- ・ 東アジア文化年 10 周年事業
- ・ 国際対話事業

## 3. 事業スケジュールについて

大阪・関西万博が開催され、国内外からの関西地域への注目が集まることが期待される 2025 年、奈良市が中国・寧波市、韓国・済州特別自治道とともに推進した「東アジア文化都市 2016 奈良市」から 10 周年となる 2026 年、そしてウズベキスタン・サマルカンド市との姉妹都市締結から 5 周年となる 2027 年の 3 か年にわたり、開催する。

### 《出席者からのご意見等》

#### ○理念、魅力発信、全般的な内容について

- ・ 2025 年の大阪・関西万博を契機とした、継続的な国際交流事業を推進することは、奈良の観光誘客に効果が期待できる取り組みであり、奈良の魅力を発信する機会であると認識している。
- ・ 国際交流に視点を置いた文化的事業の推進であり、奈良の国際的価値を発信するということからすると、それぞれの事業は魅力発信、情報発信の良い素材となるように思う。これからの国際交流、文化創造に繋がっていく期待が持てる。
- ・ 事業コンセプトのもと、舞台芸術交流事業、東アジア文化都市 10 周年事業、そして特別交流展・サミットを開催する計画とされており、これらを通じて、日本とウズベキスタンとの文化交流がより一層深まることが期待される。
- ・ 今回、3 か年をつなぐ、継続させる事業ということであるので、バラバラにならないように、3 か年をつなぐ軸となるものを創るべき。
- ・ 奈良に歴史があるということ、何か昔から残っているものに目が行きがちだが、絶えず新しい歴史がそこで重ねられ、新しい交流がある。そして、その担い手は人である。そういったところが見えるような事業であって欲しい。
- ・ 今回の事業も 3 か年にわたって、中心となる人の交流、奈良の市民とサマルカンドの人たちとの交流、観光で来られる人々と奈良の人たちの交流など、いろいろな人が交流するような取り組みが行われる。是非とも奈良の新たな歴史の始まりとして作り上げて欲しい。
- ・ 寛容さを養うことや、多様性といったことを標榜するにあたって、そのことへの理解を深めるうえで、「寛容さ」や「多様さ」を支えている「何か」があるから、寛容であり得たり、多様性を受け入れることができたりするのだということを考えるべき。その「何か」があることで、違う多様性を持った人たちが出会ったときに、相手の多様さを共有できる考え方が見出せるということなのかなと思う。
- ・ 例えば、ウズベキスタン、サマルカンドには、偶像崇拜をしないことから仏像がない。地域との交流ということであれば、イスラムの考え方、精神の上に生活・歴史があってその

上で日本と対応するものがあると思うので、そこへの踏み込みがあったら良い。

- イスラム教の扱いは難しいが、コーラン等彼らが拠り所としているもの、管理するものを曖昧にして、寛容さ、多様性といっても本当のところは分かりづらいのかなと思う。
- イスラムの考え方、生活、捉え方の違いを分かって、違うのだけど共有できることがあるという、そういう出所があると面白いと思う。
- イスラムの考え方への認識を深めたうえ、共有できるものを探っていくようにしたい。多くの人が抱きがちなイスラムが怖いというイメージに落ちないようにしたい。
- 多様性・寛容性は、現状の国際社会の中で非常に重要な考え方なので、なんらかの形できちっとコメントが出せると良い。
- 見たり体験したりすることで、お互いの文化を知るのは良いことだが、人と人との交流について、どういう交流するのかに関心がある。具体的な交流があるのか。
- 学生が共同で作品を作って展示するというのはあるが、具体的に子どもが関われる場があるのか。可能な限りユース世代（若い人たち）が関わるのが大事だと思う。
- 全体の理念はしっかりと整理されている。しかし、前回ではしっかりと盛り込まれていたユースへの考えが抜けているのが残念。
- 今回、奈良が世界的な活動を行うのなら、全世界で考えていかなければならない未来を創り出す存在としてのユースを盛り込むべきである。
- ユースを加えた人と人との交流を構築し、多様性・寛容性をこれからのユースにしっかり感じてもらえるようにすべき。
- 未来へつなぐ、創造的などという意味には、ユースの力を育て繋いでいくという意図がある。
- ユースや子どもたちが、奈良という自分たちが住んでいる街が、国際的なグローバルな位置づけだと感じ、それを発信したいと思ってもらうことが大切。
- 奈良という場所の素晴らしさを世に伝えていけるような活動に加わってもらえるような発想を持って、事業を進めて欲しい。
- 創造的文化交流を謳うなら、方法論や事業そのものが“創造的”でないと創造的ではない。気持ちとして、従来型ではなく、国際交流の方法論などをこの機会に生み出す思いを取り込んでおくべき。
- また、これを実現するためには従来型の組織体制ではだめで、組織の中にユース世代が、新しい感性で入り込む体制が望まれる。官民連携オール奈良の体制をとって、組織自体そのものを創造的なものにすべき。
- ウズベキスタン滞在中に、観光の大前提は平和だとすごく感じた。危険地域であるアフガニスタンの近くでありながら、ウズベキスタンは観光を軸に、トゲトゲせずに暮らしていることに、「寛容さ」を感じた。
- 日本人はどのくらいウズベキスタンに観光に行っているのだろうか？
- 我々もインバウンドだけを一方的に言うのではなく、奈良が、ウズベキスタンのプロモーションに貢献すべきだと思う。
- 奈良市はすばらしい国際性のあるところと改めて感じている。世界最大の先端技術のショーCES（Consumer Electronics Show）を見てみると、アメリカの原動力は多様性にある。世界の才能が集まり、技術が集まり、ジェネロシティ（寛大さ）がアメリカのシリコンバレーをつくり、巨大な文明を創った。奈良は1300年前にそれと近いプラットフォーム

ムを創ったのではないか。アメリカの現在にあるような多様文化というものが、奈良の原点にあるのではないかと思う。

- 現代の技術の大きな流れは3つに集約される。そのうちの2つについての関わりから、  
①AI (Artificial intelligence) : AI というものが単なる技術の言葉ではなくて、社会全体を貫き、あらゆるところが AI というもので浸透されてきている。これは大革命で、まさに AI の大革命の中に我々は生きているという認識をもって、奈良の多様性を考えていただきたい。
- ②グリーン：また、これからの社会は、GX(グリーントランスフォーメーション)に代表される脱炭素による環境保護策と経済活性化を同時に実現する、持続可能な未来への取り組みへの意識なしには成立しない。健康、ユース、子どもたちにもつながる概念。これを「グリーン」という観点、言葉で代表させ、奈良 2025 の事業にもそれが包含されると、世界に対して大きなプレゼンテーションになる。
- 世界が中世の時代区分であったころ、日本では古代の時代区分になるが、8~10世紀頃、奈良には東大寺、興福寺、大安寺という、当時の知の集積場所である大学が集積していた。西洋では14世紀になって初めてケンブリッジ、オックスフォードができるが、それよりずっと以前に知の塊、国際性を養う場所を持っていた。
- その奈良で、国際交流の展覧会をやるという意義、事業を展開することについての意義を考えて欲しい。
- 奈良市、サマルカンドの交流の歴史とあえて書かれているのが非常に重要。
- なぜ、いまサマルカンドの展示会を奈良でやらないといけないのか、それがしっかりとわかるような良い展覧会にしていくようにしたい。
- 展示コンセプトに2つの青とあるが、「あおによし」はそもそも青でなく緑。「あおによし」が奈良の枕詞とわかっていない日本人も多い。「あおに」とサマルカンドブルーの違いを理解できる展覧会だと良い。
- 先に「グリーン」のことを話したが、自分のように世界を行き来する人間から見ると、現在の日本人は世界に対する感受性が薄くなりがちであるように感じる。奈良時代の方が世界に対する感受性が強い。
- 本当に今、世界が変わっている。現在は、大改革の時代、産業革命の時代と振り返られる時代。そうした感性、「グリーン」に対する認識が、今の日本には薄い。あらゆる領域において「グリーン」が世界を支配していく時代にあって、奈良はそうした認識を持てる場。奈良が持つグリーン性。全体の思想を「グリーン」の観点から見直して、どこかにその言葉をもっと入れ込んでおくべき。
- 今回の奈良の動きが「グリーン」を意識したものだと世界の人から感じられる趣旨にしてほしい。今回の動きが「グリーン」に向かう社会につながる。そうすることで、かつて「グリーン」だった奈良に対して、世界の人々は、よく考えているなど受けとると思う。
- 「あおによし」は、奈良の枕言葉だが、非常に立派な土地であるという意味が、奈良にかかっている。中央アジアにおいて、サマルカンドの意味合いは「光り輝く都市」である。極東の地、奈良にも同じように光が輝いていた。そういう意味で奈良とサマルカンドという2つの都市の交流をしあうのだと考えれば、2つの青という都市の考え方も広がる気がする。

- ・ 昔、青とは、緑だった。未来の産業としての青、どちらも青。
- ・ 青という意味に込められた、日本人の伝えたいことは、自然と輝く都市とかそういうことだと思う。
- ・ 青は、サマルカンドだけではなく、古代から大事な色。空の青から来ているのかもしれないし、空が天に続くからかもしれないが、青は本当にすごく大事な色とされた。だから、例えばラピスラズリやトルコ石がものすごく珍重されるみたいなのところがあり、輝かしい色との認識があった。
- ・ ラピスラズリや、トルコ石に由来するペルシャブルーに見られるように、イスラムの中で、青は高貴なロイヤルなものとして扱われる。それにあたるものが奈良では「あおによし」になった。
- ・ ペルシャブルーと奈良の緑はどこかで関係があると感じている。
- ・ 反田恭平氏と JNO がウズベキスタンで公演することになっている。公演それだけでウズベキスタンの方々との交流・理解が深まるかは疑問である。日本の伝統的な音とか、違う芸術との組み合わせだとか、交流の意図を明らかにするようななんらかの働きかけも必要だろうと思う。東大寺での公演は、奏でられる音楽とともに、空間も時も相俟ってすばらしかった。そうしたことが重要だと思った。

#### ○事業推進、組織体制に関する意見

- ・ 3 か年にわたる事業であり、各事業それぞれが全体コンセプトにそった有機的関係をもつように、また、息切れしないような事業運営・プロモーションをしていく工夫が肝要であると感じる。
- ・ エリアの連携が非常に重要となると想定される。特に特別交流展の 2027 年は、東大寺をはじめとするお寺との回遊があるべきであり、東アジア文化都市 10 周年の 2026 年は、ならまちはじめ、街全体で市民と観光客が交流できるように、面的な事業展開を検討したい。
- ・ 文化庁では、かねて舞台芸術への支援事業や、国際文化交流・協力推進事業等に対する支援等を行っており、今後も実施に向けたノウハウ等、助言できることもあると思う。
- ・ 今回の案件は、おそらく文化と観光、その他の様々な部局が連携しないとできないような構成になっていると思うので、ぜひオール奈良市で、3 か年の事業を推進していただければ。
- ・ 奈良市として取り組む大規模な事業であり、企画とともにそれを実現するための体制が必要である。市をあげての組織づくりを速やかに行なっていただきたい。
- ・ 何を持ってこの事業の評価となるかを考えるべき。新たな人の交流が生まれることに加えて、経済効果、創造的人材育成、新たな産業振興などが後に評価されるような試みになれば良い。GX、DX なども 3 か年の後で奈良の観光歴史文化に関するデジタル化が進み、「グリーン」も歴史文化と連携する新しいビジネスモデルが奈良から生まれたということになれば、事業は成功になると考える。新たな人材と新たな担い手、新たな産業、新たな奈良を生み出す事業にしていくことができればよい。